

# 研究主題 「小学校音楽科における音楽的感受性をはぐくむ指導の工夫」

～音楽をつくって表現する活動と鑑賞を関連させて～

東京都教職員研修センター研修部経営研修課  
目黒区立碑小学校 教諭 大湊 由紀子

## 研究テーマ設定の理由及び研究のねらい

児童が生涯にわたって音楽を愛好し、明るく豊かな生活を送るためには、音楽的感受性を育成することが大切であり、音楽的感受性をはぐくむことは、美しいものや崇高なものに感動する心を育て、豊かな人間性や生きる力の育成にもつながると考える。

今、音楽科に求められているのは、児童一人一人が主体的に音楽とかかわり、児童自らが音楽の美しさや特徴を感じ取り、音楽への思いを膨らませていく音楽活動である。

そこで、本研究では、児童自らが音楽とかかわり、音楽を美しいと感じる心を育てる「音楽をつくって表現する活動」と「鑑賞の活動」の関連を図り、児童の思いや感じ方と音楽の要素を結びつけて音楽的感受性をはぐくむ指導と評価の工夫について、明らかにする。

## 研究の方法

- 1 基礎研究 研究主題に関する文献及び先行研究
- 2 調査研究 「音楽的感受性をはぐくむ指導の工夫」についてのアンケート調査の実施
- 3 検証授業 第2学年 題材名「どうぶつの音楽をつくろう」(全4時間) 第4学年 題材名「遊んでいるようすを音楽で表現しよう」(全6時間)

## 研究の内容

### 1 基礎研究

文献及び先行研究より明らかになったこと

- (1)音楽的感受性とは、音楽の様々な特性に対する感受性を意味している。具体的には、リズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感など、感覚的に受容される音楽の諸要素に関する刺激に対して、音楽的に反応するなど、表現や鑑賞の活動の根底になるものである。(小学校学習指導要領解説 音楽編)
- (2)音楽的な感受を「音楽を特徴付けている要素、構成、曲想などを、思いやイメージをもって感じ取ること」と定義付ける。音楽的感受性と区別するとともに、評価の観点のもととする。
- (3)音楽をつくって表現する活動では、児童が創意工夫し、音楽をつくり出そうとする過程で音楽的感受性をはぐくまれる。また、この活動は、音楽の要素や曲想について学び、イメージをふくらませて、創造的な表現へと結びつけていくものである。
- (4)鑑賞では、音楽を聴いてそのよさや美しさを感じ取ったり味わったりすることにより、音楽的感受性をはぐくまれる。この能力は、楽曲の気分、曲想、楽曲を特徴付ける要素や構成、楽器や声の特徴などを感じ取って聴く活動を通して育てられるものである。
- (5)音楽をつくって表現する活動と鑑賞の活動を関連させる際に、音楽の要素と曲想を共通の学習内容として設定することにより、音楽的な感受が高まることが分かった。
- (6)音楽的な感受の評価については、題材の評価規準の「音楽的な感受や表現の工夫」を中心として、評価する。

基礎研究の内容から、仮説を次のように導きだした。

《仮説》音楽をつくって表現する活動と鑑賞を関連させ、児童の思いや感じ方と音楽の要素を結びつけた指導と評価の工夫をすることにより、一層、児童の音楽的感受性をはぐくむことができる。

### 2 調査研究

調査内容	小学校音楽科における、音楽的感受性をはぐくむ指導の工夫	実施時期	平成16年8月
対象者	目黒・品川・大田区の全公立小学校123校の音楽を担当している学級担任・音楽科専科	回答数	学級担任166音楽科専科97

調査結果の全体的な傾向と課題は、次のとおりである。

項目	傾向	課題
音楽的感受性をはぐくむために指導の工夫をしている活動	歌唱・合唱及び楽器演奏・合奏などにおける実践の回答が多い。	音楽をつくって表現する活動と鑑賞における実践の回答が少ない。
音楽的感受性をはぐくむために重視していること	感じ取ったり、聴き取ったりすることの回答が多い。	「音楽固有の雰囲気、曲想、美しさ、豊かさなどと音楽的な諸要素を結び付けて表現したり鑑賞したりする」視点をもつことも必要である。
音楽的感受性の具体的な評価方法	歌唱・合唱、楽器演奏・合奏、身体表現の様子を観察する、演奏を聴くなどの回答が多い。	創作や鑑賞の観察での評価は回答が少なく、学習カードの活用や録音・録画については極めて少ない。

これらの結果から、音楽をつくって表現する活動と鑑賞において、音楽的感受性をはぐくむ指導を行い評価することと、音楽固有の雰囲気、曲想、美しさ、豊かさなどと音楽的諸要素を結びつけて表現したり鑑賞したりすることが必要であることが明らかとなった。

### 3 検証授業

#### (1) 検証授業の視点と具体的な指導の手だて

基礎研究、調査研究、仮説から、検証授業の視点と具体的な指導の手だてを次のように考えた。

検証の視点	具体的な指導の手だて
児童が主体的・創造的に活動する学習過程の工夫	音楽をつくって表現する活動と鑑賞を関連させた学習過程の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>曲想や楽曲を特徴付けている要素を感じ取る鑑賞と、イメージを膨らませ、児童の思いと音楽の要素を結び付けて音楽をつくって表現する活動を交互に行う学習過程とする。</li> <li>音楽をつくって表現する活動と鑑賞における共通の学習内容の設定</li> <li>双方の活動において音楽の要素と曲想に関する共通の学習を設定する。</li> </ul>
意図的・段階的な指導の工夫	意図的な指導の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>児童の思いや感じたことと音楽の要素を結び付けた学習カードの活用、助言、範奏を工夫する。</li> <li>楽曲を特徴付けている要素と曲想を結びつけて対照的な楽曲を聴き比べたり、同一曲を異なる演奏形態で聴き比べたりする。</li> </ul> 音楽をつくって表現するための段階的な指導の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>音楽づくりの前に、レディネスを高める旋律の模倣、旋律問答を取り入れる。</li> <li>音楽づくりでは、五音音階を選択する。</li> </ul>
音楽的な感受の評価の工夫	児童の思いや感じ方と音楽の要素を結びつけるような評価の工夫 <ul style="list-style-type: none"> <li>児童の思いや感じ方と楽曲を特徴付ける音楽の要素を結びつけた身体の反応を観察する。</li> <li>発話における、児童の思いや感じ方と音楽の要素の分析をする。</li> <li>児童の思いや感じ方と楽曲を特徴付ける音楽の要素を記す学習カードを活用する。</li> </ul>

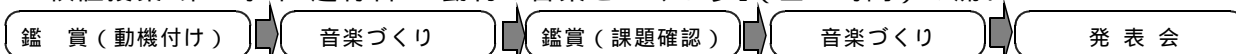
#### (2) 検証授業の結果と考察

第2学年と第4学年の検証授業の結果を研究の視点から考察する。

児童が主体的・創造的に活動する学習過程の工夫

検証授業の学習過程の流れは、以下の表のとおりである。

検証授業 第2学年 題材名 「動物の音楽をつくろう」(全4時間)の流れ



検証授業 第4学年 題材名 「遊んでいるようすを音楽で表現しよう」(全6時間)の流れ



#### ア 音楽をつくって表現する活動と鑑賞を関連させた学習過程の工夫

第2学年・第4学年の検証授業では、「鑑賞」「音楽をつくって表現する活動」を交互に取り入れた学習過程を設定した。題材の最初に行った鑑賞は、児童の音楽づくりへの動機付けとして有効であった。児童は、旋律や速さの特徴や曲想を感じ取って鑑賞したり、イメージ

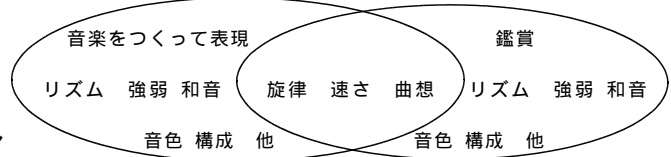
を膨らませて創造的に旋律をつくったりしながら、音楽的な感受を高めていった。配慮事項として、児童がモチーフや旋律をつくる際の時間の確保、題材の途中で鑑賞を設定する際の時期の決定が挙げられる。

イ 音楽をつくって表現する活動と鑑賞における共通の学習内容の設定

《第4学年の検証授業の例》

音楽をつくって表現する活動と鑑賞を関連させる際の共通の学習内容についてのイメージ図 図 - 1

第4学年の鑑賞の活動では、曲想及び、リズムや速さの特徴を感じ取る学習を行った。鑑賞で学習した内容が、すべてのグループの作品の旋律や速さ等に影響を及ぼしていることが分かった。また、授業後の児童の感想でも、鑑賞を音楽づくりに生かした30人中15人、少し生かした11人、生かさなかった0人であり、効果があったと考える。

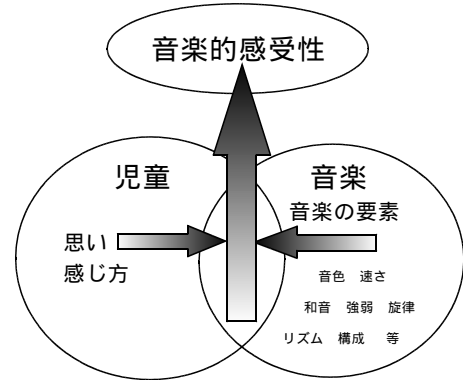


意図的・段階的な指導の工夫

ア 意図的な指導の工夫

音楽づくりや鑑賞の学習カードでは、速さ、強弱などの音楽の要素を記す欄と、曲想、曲の気分、思い浮かんだ様子などを記す欄を設けるなどの工夫を行い活用した。音楽づくりでは、児童が、自分の思いと音楽の要素を結びつけることができるような手立てを考え助言し、音色や速さ、強弱を変化させた範奏を試みた。

音楽的感受性をはぐくむためのポイント



鑑賞では、比較聴取を行い、児童の思いや感じ方と楽曲を特徴付けている音楽の要素とを結び付けるようにした。比較聴取の2例として、具体的内容を以下の表に示す。

第2学年第1時間目 具体的評価規準：楽曲を特徴付けているリズム、旋律及び速さの特徴を感じ取っている。	第4学年第1時間目 具体的評価規準：対照的な楽曲を聴き比べ旋律や速さ等の違いに気づき、曲想を感じ取る。
ア「白鳥」 (サン＝サーンス)	ア『こどもの情景』より「鬼ごっこ」 (ロベルト・シューマン)
イ「くまばちは飛ぶ」 (リムスキー＝コルサコフ)	イ『こどもの情景』より「トロイメライ」 (ロベルト・シューマン)
ウ「たまごのからをつけたひよこのおどり」(ムソルグスキー)	
エ「こぞうの行進」 (マンシーニ)	

第2学年の比較聴取では、対照的な楽曲を聴いたことにより、30人中29人が音楽の特徴を感じ取り、動物の様子を思い浮かべて音楽を聴くことができた。また、第4学年の比較聴取では、29人中28人が、旋律の特徴や速さの違いを感じ取り、イメージをふくらませることができた。

児童の思いや感じ方と音楽の要素を結びつけるための学習カードの活用や助言、範奏の試み、比較聴取などの指導の工夫は、児童の音楽的な感受を高めるために有効であった。このことは、学習カードやビデオの分析より明らかとなった。

イ 段階的な指導の工夫

児童が自分の思いを旋律で表現するためのレディネスを高める必要があると考え、児童の思いと音楽の要素を結びつけるための段階的な指導の工夫を行った。具体的には、導入で旋律の模倣、問答などを行い、児童の表現の意図を引き出していく指導を行った。第4学年の5音音階をつかった音楽づくりでは、音の重なる美しさや響きの豊かさを感じ取り、様子を思

い浮かべた音楽をつくることができた。その手法としては、すべてのグループが、同一音型によるくり返しを生かしたドローンやオスティナートなどを使った。また、児童の実態に合わせて、2音、3音などの少ない音で旋律をつくることを助言した結果、第2学年では、2音や3音で旋律をつくった作品が半数をしめ、第4学年では、すべての作品が5音を用いた旋律となっていた。このような段階的な指導の工夫により、児童の音楽的な感受や表現の工夫がなされたと考える。

#### 音楽的な感受の評価の工夫

音楽的な感受の評価としては、第一に児童の思いや感じ方を音楽の要素と結び付けている状態を考慮して、「音楽的な感受や表現の工夫」の評価規準を作成した。第二に、評価の方法としては、演奏聴取、身体反応の観察、発話の観察、学習カードの記述、児童の作品の記譜、ビデオによる評価を用いた。第三に、児童の思いや感じ方と音楽の要素を結びつける過程をとらえるため、「身体反応による観察」「発話の観察」「学習カードによる評価」を関連させて評価をした。検証授業の考察は、次のとおりである。

#### 身体反応による音楽的な感受の観察

第2学年の鑑賞では、「たまごの殻をつけたひよこのおどり」と「白鳥」の比較聴取を行った。指を動かしながら細かい旋律の動きから生まれる気分を感じ取ったり、手をゆっくり動かしながら白鳥の様子を感じ取っている児童の姿が見られた。また、第4学年の鑑賞、「ゴリウオークのケーキウオーク」では、速さや、強弱及び、曲想の変化を感じ取るために身体反応による観察を行ったことにより、全員の学習の様子が分かり、音楽的な感受の評価を行うことができた。

#### 発話の観察

教師と児童、児童同士のコミュニケーションの中に感受に関する内容が含まれていることが分かった。本研究では、「音楽的な感受」に関する評価の内容を次のように分析した。

児童の発話を 音楽の諸要素に関すること 曲想・感じ取ったこと・イメージ 音楽の諸要素と曲想やイメージを結びつけているものとして分類し、指導と評価に生かした。表は、その一部を示した。

「白鳥」「たまごの殻をつけたひよこの踊り」の比較聴取後の発話 第2学年	「トロイメライ」鑑賞後の発話 第4学年	音楽づくりにおける発話 第4学年
T「白鳥とたまごの殻をつけたひよこの踊りとどちらが速かったでしょうか。」	T「どんな様子が思い浮かびましたか。」	A「ブランコに聴こえないでしょう。」
A「ひよこ。」	A「寝ている時だと思う。」	A「ゆったりゆったりでしょう。」
	B「夕日が沈む時。」	B「それは、Aさんのイメージでしょう。」
	C「風が吹いて、また葉っぱがゆれる。」	B「ぼくのイメージでは、速いんだ。」

#### 学習カードによる評価

鑑賞用のカードでは、「分かった音楽の要素」「曲想、感じ取った雰囲気、思い浮かべた様子」「なぜそのように思ったか」などの項目を設定したことにより、児童の思いと音楽的な要素を結び付けて評価を行うことができた。また、音楽づくり用カードでは、児童の表現したいイメージとつくった旋律を結び付けて評価することができた。

このように、より具体的な評価規準を設定し、評価方法を多様にするとともに、それらを関連付けることで、児童の音楽的な感受の高まりを評価した。指導と一体となる評価について、さらに工夫をする必要がある。

#### 研究の成果と課題

本研究の成果は、音楽をつくって表現する活動と鑑賞の活動を関連させ、児童の思いや感じ方と音楽の要素を結び付けた指導と評価の工夫をすることにより、児童の音楽的な感受が高められることが明らかになったことである。

課題は、音楽をつくって表現する活動と鑑賞の活動の関連を図った題材を、さらに開発し、第1学年から第6学年までの年間指導計画に位置付け実践をする。また、音楽を担当している学級担任との連携をはかり、指導方法や評価の工夫をすることである。